

当科における哺乳瓶乳首消毒の検討 (GBS, カンジダを通して)

産科：田沢 享子

1. はじめに

当科では、哺乳時に使用する哺乳瓶乳首を一般の新生児については、共有して使用し、ミルトン液消毒をしている。B群溶連菌 (GBS) 陽性の児、カンジダアルビカンス (カンジダ) 陽性の児、またそれらの陽性の母親より出生した児の使用する乳首を個別に扱い、ミルトン液消毒も個別に分けて行っている。これについて、母児間の感染の実態を調査すると同時に当科で行っている乳首消毒に対する意識と理由を明確にし、見直す機会としたいと考えたこの研究に取り組んだ。

2. 研究目的

- 1) GBS, カンジダ陽性の母親より出生した児の乳首を個別に分けてミルトン液消毒を行っている根拠と必要性について、スタッフがどのように考えているかを知る。
- 2) 母親の膣分泌培養と新生児の咽頭分泌培養を行うことにより、母児間の感染の実態をGBS, カンジダを指標として調べる
- 3) ミルトン液の消毒効果について知る。

3. 研究方法

- 1) 2-1) についてアンケート調査をスタッフ17名に行う。
- 2) 2-2) について新生児 (出生直後, 生後5日目) の咽頭分泌物を, 血液寒天培地, サブロー寒天培地に, 塗布培養を行う。
母親の膣分泌培養は, 入院時の培養効果を参考にする。
- 3) ミルトン液 (次亜塩素酸ナトリウム) の消毒効果について文献検索する。
- 4) 使用済ミルトン液の細菌培養を行う。
- 5) ミルトン液中に10分の1の新鮮培養菌液を加え, 経時的に残存菌数を調べる。(カンジダ, 黄色ぶどう球菌を用いる。)

4. 研究結果

- 1) アンケート調査において, 乳首を分けてミルトン液消毒を行っている理由は産道感染をうけて, さらに乳首を介して水平感染を予防するためと答えた者は11名, しかしそのうちの9名はミルトン液消毒の効果があるならば, 必要はないと考えており矛盾を感じているスタッフの多いことがわかる。(図1-A)
以前から分けているのでなんとなくと答えた者は5名で, 理由があやふやなまま毎日流されている面も見受けられた。(図1-B)
- 2) 当科で分娩した37例の母と, 出生直後の新生児の母児間の感染について, 37名中母のみ陽性は4名, 母児共に陽性は, 1名であった。(図2-GBS)
37名中母のみ陽性は7名, 母児共に陽性は, 1名であった。(図3-カンジダ)

生後5日目の新生児咽頭培養では全例陰性であった。

- 3) 五島ら¹⁾によれば、GBS、カンジダ共に消毒効果は認められている。
- 4) 使用済ミルトン液より、細菌は検出されなかった。
- 5) カンジダ、黄色ぶどう球菌について、ミルトン液中の生残菌数の推移をおって見たところ、カンジダについては1分後以降、黄色ぶどう球菌については2分後以降検出されなかった。(表-1)

5. 考察

当科の新生児室は健康な新生児を看護する場であると同時に、感染症の新生児を看護する場でもある。産道感染によっておこりうる新生児感染症の指標として、GBS、カンジダを用いた。ことに、GBSは新生児が感染すると、重篤な状態に陥る。妊婦腔のGBS検出率は、11~15%であり、うち1%の新生児に発症すると報告されている²⁾。

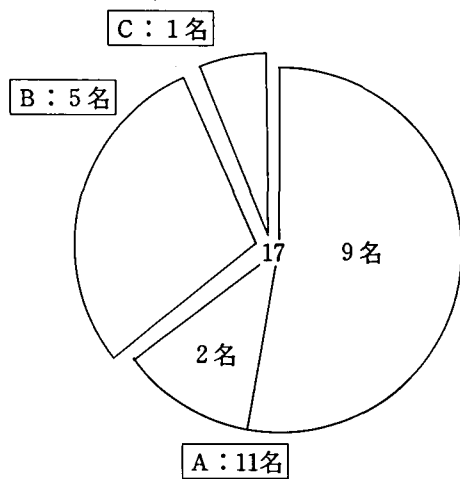
乳首消毒は、日常的に行われている重要な新生児管理のひとつであるが、科学的に証明されていることを認識し、細菌学的に実験証明したことで、スタッフの意識が明確になり、乳首消毒方法を再検討の上、実践できるようになった。また、乳首消毒だけでなく、新生児室内における水平感染を防止していくためには、スタッフ各々の徹底した看護行為はもちろんのこと、徹底した意識によるところにあることを強く感じた。

6. まとめ

- 1) GBS感染症発症率は低いものの、産道感染をまったく否定することはできない。
- 2) 哺乳瓶乳首消毒はミルトン液で十分消毒効果があることから、GBS、カンジダについて個別に消毒する必要性はない。

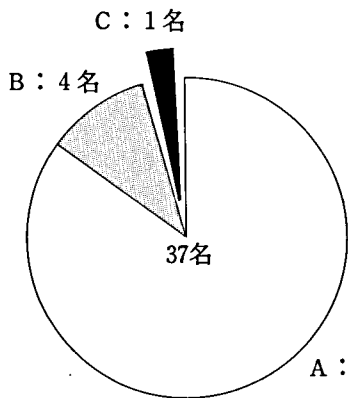
7. 引用・参考文献

- 1) 五島差智子他：感染症学，メジカルビュー社，1982，P451.
- 2) 門井 伸也：B群溶連菌，周産期医学，119(11)：73，1989.
- 3) 三科 潤：健康新生児室の院内感染とその対策，周産期医学，22(2)181,1992.
- 4) 山内 貞夫：新生児の産道感染の病態，周産期医学臨時増刊号，17：247,1987.



- A：哺乳瓶乳首を介した水平感染を予防するため・・・11名
(しかし必要性は感じない・・・9名)
- B：以前から個別に分けているのでなんとなく・・・5名
- C：無回答・・・・・・・・・・・・・・・・・・1名

図1. 個別に分けている理由



- A. 母児ともに陰性
- B. 母のみ陽性
- C. 母児ともに陽性

図2. GBS 培養結果

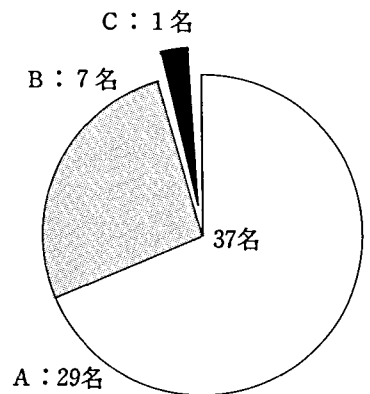


図3. カンジタ培養結果

表1. ミルトン液中の生残菌数の推移

菌種	生 残 菌 数 / ml				
	0分	1分	2分	5分	10分
カンジダ	1.9×10^7	$< 1 \times 10^2$	$< 1 \times 10^2$	$< 1 \times 10^2$	$< 1 \times 10^2$
黄色ブドウ球菌	7.2×10^7	6×10^2	$< 1 \times 10^2$	$< 1 \times 10^2$	$< 1 \times 10^2$